

## 青森ねぶたの造形的構成及び分類に関する一考察

工藤 友哉

本論文では、青森市で開催される青森ねぶた祭にて制作される「青森ねぶた」の造形的構成と、その分類について考察している。青森ねぶたとは、針金と角材による立体的な骨組みに和紙を貼り、墨やロウ、染料や水性顔料で彩色した立体燈籠である。台車上の造形物は「ねぶた師」と呼ばれる職人の手により毎年作りかえられており、日本や中国の史実、伝説を表現した勇壮華麗な武者人形を表現することが多い。しかし、その実態を論じた論文は数多くない。『芸術文化』第22号掲載の筆者拙稿「青森ねぶたの造形的変遷に関する一考察」では青森ねぶたの時代毎の造形的変遷を追ったが、本稿はその後続研究としている。

本稿では青森ねぶたの台車上の造形物に関して、「造形物」「配置方法」「姿勢・構図」「装飾物・舞台装置」の4つの視点により分類を試みた。「造形物」の章では、登場する人物像の諸相を概観した。史実上の偉人や武将が多い中、女性の造形が少ないこと、脇役である鬼や動物は単体で主役を張らないことなどが判明した。「配置方法」では、造形される人形や大型の動物などの主要モチーフの数に応じて、一定の規則的な配置方法を解析した。人形は1体から3体ほどで構成されることが多く、横一列に前後の遠近感をつけながら並置する基本的な法則があると見なしている。その中で、人形の姿勢や人形同士の関わり方によっては、基本的な配置方法に当てはまらない構図も出てくる。それら一定の構図パターンを「姿勢・構図」の章では追加で補足した。横に広い青森ねぶたの造形様式では、人形が片足を伸ばす姿勢が大多数を占め一般化されているが、中には天地反転した人形や宙に舞う人形の躍動感ある構図も存在している。その他、題材の場面演出に欠かせない人形・動物以外のモチーフを「装飾物・舞台装置」としてまとめ、舞台上で言うところの大道具や小道具にあたるモチーフや、波や炎といった自然景物に関するモチーフの詳細を述べている。

以上のように、モチーフや配置規則、構図、装飾物など、造形物の種類と構成方法はある程度多岐に渡っていたものの、一貫して「勇ましく構えた武者人形を中心とした造形」とされる傾向が強いことが裏付けられた。人形や動物はある程度決まった配置規則のもとで構成され、一定の様式美を守りながらも、限られた空間の中でいかに真新しく効果的にモチーフを構成するかが、現代の青森ねぶたの表現傾向にあるようだ。

今後は青森市外・津軽全域の人形燈籠も対象とし、地域毎の傾向や相互の影響関係などに視野を広げたい。